



令和 8 年 8 月 27 日
第十管区海上保安本部

「海の地図を学ぼう」パネル展開催

～9月12日は第155回水路記念日です～

155年前の明治4年9月12日、我が国初の海図作製機関である兵部省海軍部水路局が発足し、この日を「水路記念日」としています。

第十管区海上保安本部では、水路記念日にあわせて、鹿児島市立科学館及び鹿児島県立博物館において、「海の地図を学ぼう」と題し、船舶の安全な航海に必要不可欠である「海図」とはどのようなものか、その歴史も含めパネル展示で紹介します。

1. パネル展開催場所、日時

① 鹿児島市立科学館 2階エントランスホール(見学無料)

展示期間：令和8年9月9日(水)午後1時～9月16日(水)午後1時

所在地：鹿児島市鴨池2丁目31-18

電話：099-250-8511

② 鹿児島県立博物館 別館(宝山ホール)4階多目的スペース(見学無料)

展示期間：令和8年12月22日(火)～12月27日(日)

所在地：鹿児島市城山町1番1号

電話：099-223-6050

※各施設の開館日、開館時間のみの開催です

2. 展示内容

- (1) 柳檣悦と海図第一号
- (2) 鹿児島港、山川港、奄美大島、名瀬港の海図の移り変わり
- (3) 海の深さについて(測り方など)
- (4) 現在の海洋情報業務の紹介 等々

3. その他

取材を希望される社におかれましては、科学館での取材は9月8日(火)まで、博物館での取材は12月21日(月)までに別紙、取材申込書を第十管区海上保安本部海洋情報部監理課あてFAX又はメールでご連絡下さい。

展示物の例

(1)「柳 檣悦と海図第一号」パネル(案)

日本海國の創始者 (初代水路部長) **柳 檣悦** (やなぎ ならよし)



柳 檣悦 (1832年~1891年) は、津藩の小納戸役、柳 惣五郎の長男として江戸で生まれた。
若き日より和算に熟達し、津藩から派遣された長崎海軍伝習所ではオランダ式の近代的な航海術や西洋数学に基づく測量術などを習得した。周所では藤 海舟をはじめ、川村 崋義、五代 友厚、小野 友五郎、親岸 策、榎本 武揚など、後に江戸幕府や明治政府で活躍する人達が学んでいる。
文久2年 (1862年) には幕府海軍の成蹊丸に従って伊勢、志摩、尾張の沿岸を測量している。

小納戸役：藩主の身の回り事務や税銀・諸度品の管理を担当した近侍の役職

明治2年 (1869年) の新政府による海軍創設の基幹要員として上京、兵部省の御用閣に出仕し、的矢・尾鷲、備後瀬戸の測量に従事、我が国初の水路測量原因といわれる「豊後諸島測量原圖」を作成した。明治5年 (1872年) には、日本で初めての海図「**陸中國釜石港之圖**」を刊行する。ともに明治4年 (1871年) に実施した、北海道での沿岸水路調査の成果として「春日記行」と測量の大綱「**量地提要**」を著した。我が国の手による初の水路誌「**北海道水路誌**」はこの「春日記行」を基に1873年 (明治6年) に刊行されたものである。1880年 (明治13年) 世界各國の水路誌の翻訳に着手し、**量測 (かんえい) 水路誌**として刊行していくこととなる。



陸中國釜石港之圖



量地提要



北海道水路誌



量測水路誌

水路業務に係る組織は、明治4年以降、水路局、水路寮、水路局を経て1886年 (明治19年) に海軍水路部となり、柳は初代の水路局長・部長に就任すると「水路事業の一切は海員精神に依り、微細徹尾外人を雇用せず自力を以て、外國の學術技藝を選択利用し、改良進歩を期すべし」という、自主独立の大方針を貫き、日本における海洋測量の第一人者として測量体制を整備、統率し日本各地の沿岸、港の測量並びに海図作成を推進した。

「柳 檣悦」説明パネル

海図第一号 **陸中國釜石港之圖**

○海図第一号『**陸中國釜石港之圖**』
日本海軍水路部が初めて自らの手で測量し、明治5年に刊行した海図です。水深の単位には「尋」(約1.8m) が用いられ、印刷版は銅版を手に彫りて作られています。
釜石港は当時開港していた東京港と面館港を結ぶ中間補給地点として重要な港湾であったこと、高炉による鉄鋼の生産に成功し、官営製鉄所建設の直前であったことから、第一号海図の対象港として選ばれたものと考えられています。



○奇跡的に見つかった印刷原版
大正12年9月1日の関東大震災で、水路部の施設も大きな被害を受け、創設以来50年にわたる貴重な資料や、測量原因の大半、海図原図約2,500版全てが失われたなか、焼け跡の中から、『釜石港之圖』の印刷原版が、一部欠損した状態で発見されました。
水路部の原点ともいえる釜石港の海図の印刷原版がほぼ無傷で発見されたことは、当時の水路部において、奇跡的な出来事と受け止められました。



海図第一号「陸中釜石港之図」説明パネル

(2)「海図で見る「鹿児島港」「奄美大島」の移り変わり」パネル(案)

海図で見る **鹿児島港の移り変わり**

【鹿児島港】鹿児島は薩江湾中島という陸地と自然のものと、大隅半島や種子島など島を結ぶ人馬、物資の拠点であり、海軍の交通拠点としても重要な役割を果たしています。
鹿児島港の海図は、明治9年 (1876年) 3月に初めて作成され、当時の鹿児島港の港は、現在の水運機能に限定されていました。〔鹿児島、奄美地区まで含まれる〕
また、鹿児島は、天保3年 (1832年) の大噴火により陸続きになったため、それ以前に作成された海図では海に囲まれていたことがわかります。

明治9年3月刊行「**薩摩内海之圖**」
明治5年 (1872年) に海軍省設置所属の測量艦「**鹿島**」で、測量を行って作成されています。当時の測量方法で得られた海図の精度が低いため、水深の単位は「尋」(約1.8m) が用いられています。

平成26年12月刊行「**鹿児島港**」
海図が広がり、現在は沿岸と島嶼の海図も利用されています。

天保3年噴火により、大隅半島と種子島は陸続きになったため、海図には陸続きの記載があります。

「鹿児島港の移り変わり」パネル

海図で見る **奄美大島の移り変わり**

【奄美大島】奄美大島は、鹿児島と沖縄のほぼ中間に位置しており、明治維新前の1855年にアメリカが島全体の概略的な測量を行いました。
我が国では、奄美大島と大隅半島の間の距離を測ろうとともに、アメリカが測量していたデータの一部を基盤のものに頼りて測量し、明治9年 (1876年) に海図を利用しています。当時の海図には、海からの見え方を模倣した「対景図」が記載されています。

明治9年刊行「**奄美大島全圖**」
水深情報は、沿岸海域がほとんどであり、当時の測量技術では、水深の深い海域の調査より、沿岸域での調査を優先していたことがわかる。
海から見える景色も航海するうえで重要な情報として記録されており、場所では記載されていないリアルな「対景図」が描かれている。
複雑な大島海岸の海岸線も高い精度で再現されている。

平成14年2月刊行「**奄美大島付近**」
測量技術の発達により、水深の深い海域の水深情報も付加されているのがわかる。

「奄美大島の移り変わり」パネル

取材申込書

第十管区海上保安本部海洋情報部監理課 あて

【水路記念日パネル展示】

報道機関名： (名)

代表者携帯電話番号：

氏名
【例】海保 太郎

備考：

- ※ 取材申込み期限 科学館：令和8年 9月 8日（火）まで（期限厳守）
博物館：令和8年12月21日（月）まで（期限厳守）
- ※ 取材申込の際、取材希望日時と取材場所（鹿児島市立科学館又は鹿児島県立博物館）を併せて備考欄にご記入願います。
- ※ FAX 番号 099-250-9802（直通）